



漢語動名詞の品詞用法に見られるジャンル差と文体特性 : 頻度分析および特徴語分析に基づいて

陳, 迪

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 484:1-18

(Issue Date)

2026-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100502560>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100502560>



漢語動名詞の品詞用法に見られるジャンル差と文体特性

—頻度分析および特徴語分析に基づいて—

陳 迪(神戸大学)

chendi24410@gmail.com

Genre Differences and Stylistic Characteristics in the Part-of-Speech Usage of Sino-Japanese Verbal Nouns: A Frequency-Based and Keyword-Based Analysis

CHEN, Di (Kobe University)

概要

本研究は、現代日本語における漢語動名詞の品詞用法がジャンルおよび文体とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。分析には、日本語母語話者書き言葉・話し言葉コーパスの 25 ジャンルを対象とし、重要漢語動名詞 200 語の出現分布を抽出したうえで、頻度分析および特徴語分析を実施した。その結果、ジャンル間には品詞用法に統計的に有意な差が認められ、25 ジャンルは「動態的文体」「中立的文体」「静態的文体」の三類型に区分されることが示された。さらに、「動態的文体」では操作・実行・進行を表すサ変用法が優勢であり、「静態的文体」では制度的・規範的な名詞用法が集中する傾向が確認された。一方、「中立的文体」では抽象概念語が名詞用法とサ変用法の双方において比較的均衡的に分布していることが明らかとなった。これらの結果は、漢語動名詞の品詞選択が文体的要請に基づく機能的選択であることを示唆し、日本語教育における文体別語彙指導の基礎的知見を提供するものである。

キーワード

漢語動名詞、品詞、ジャンル、文体

1. はじめに

日中両言語における漢字語彙は、形態・意味・音韻の面で多くの共通点や類似性を有しており、これらの特徴は中国語を母語とする日本語学習者(L1 Chinese learners of Japanese: 以下、CLJ)にとって、日本語語彙の理解や習得を一定程度促進する要因となっている。一方で、多くの先行研究(何, 2015; 熊ほか, 2016; 秦, 2024)は、両言語の統語体系の相違により、CLJ が漢字語彙の統語的運用に困難を抱えやすいことを指摘している。とりわけ、名詞用法と「する」を伴うサ変動詞用法の両方を取り得る漢語動名詞(例: 学習(する)、努力(する))は、多品詞性を有するため品詞選択を含む統語的制約が複雑であり、CLJ であっても誤用が散見される。実際、学習者コ

一パスにおいても、漢語動名詞の品詞選択に関わる誤用が確認されている。以下に、『北京日本語学習者縦断コーパス』(B-JAS)における CLJ の産出例を示す。漢語動名詞を含む箇所は下線で示す。なお、<K>は学習者の発話、<C>は調査者の発話を表す。

- (1) <K>んー新鮮の、う、いいえ、ん、へ心、心から、あーの一、成長があります、うーそして、うーそれは、一番の、んさ最後の教師お (CCB011-I2-01-02)
- (2) <K>さんは一、いつも、経験をしています # <C>うん # <K>うー、楽しかったですね # <C>経験# 経験をしています、じゅん、あー、ファイティング # <C>あー、〈あ〉けんかですね # <K>あけんか、 (CCB012-I1-01-01)
- (3) <K>私はあの日本の一、あの一、日本の、あのは、日本は、が、発達、す、の国家ですから〈うんうんうんうん〉、日本の、あの一、あの一教育技術、教育、 (CCB018-I1-02-03)

まず、例(1)の「成長があります」は、日本語では通常「成長する」といった変化の叙述、あるいは「成長が見られる」といった客観的提示がなされる場面であり、「～がある」という存在構文に直接組み込まれている点で不自然である。これは、中国語の“有(～がある)成長(成長)”に対応する構造を直訳的に適用した「名詞＋がある」という母語干渉の典型例といえる。例(2)は形式上サ変構造として成立しているが、「経験」という抽象語を「いつも～をしている」という反復・習慣的動作として述べることで語用的な違和感が生じている。サ変可能語の意味・機能的制約を十分に区別せず、一律に「名詞＋を＋する」の枠組みに当てはめた過剰一般化といえる。例(3)では、「発達、す、の国家」と連体修飾構造の形成に混乱が見られる。中国語の“发达国家”において“发达(発達)”が形容詞的に機能するのに対し、日本語では連体修飾に際してサ変活用(発達した)を必要とする。

以上の産出例から、CLJ の漢語動名詞運用における困難は単なる語彙知識の不足ではなく、漢語動名詞が有する多品詞性および各用法に付随する統語的・語用的制約が十分に内在化されていないことに起因すると推察される。

さらに注目すべき点は、これらの誤用がいずれも対話場面における口頭産出で観察されたものであるという点である。すなわち、漢語動名詞の品詞選択は、単なる文法的規則の問題にとどまらず、産出媒体やジャンルといった文体的要因とも密接に関わっている可能性がある。例えば、学術論文では名詞化による客観的な事態提示が好まれる一方、日常会話ではサ変動詞による動的記述が選択されやすいといった文体差が想定される。しかしながら、従来の研究では、こうしたジャンル・文体の観点から漢語動名詞の品詞運用を体系的に分析した研究は十分に見られない。

日本語の漢語動名詞は、発話者の意図や媒体の性質に応じて、名詞として事態を概念化・固定化するのか、あるいは動詞として事態の推移を記述するのかを適切に使い分ける必要がある。しかし、CLJ にとって、どのジャンルにおいてどの用法が優先されるのかという文体的基準は必ずしも明確ではない。そのため、文脈に適合しない名詞化や、サ変構造の過剰一般化といった不自然な運用が生じやすいと考えられる。

したがって、漢語動名詞の習得を支援するためには、個別語の意味や活用の指導にとどまらず、ジャンルというマクロな枠組みにおいて各品詞用法がどのように分布し、どのような機能を担っているのかを体系的に明らかにすることが不可欠である。そこで本研究では、現代日本語における漢語動名詞の品詞用法(サ変用法・名詞用法)が、ジャンルおよび文体とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。本研究で得られる知見は、将来的に、ジャンルに応じた品詞運用を意識化させるコミュニケーション重視型教材の開発へと接続されることを視野に入れている。

2. 先行研究

CLJ による日本語漢語の習得および処理に関する先行研究の多くは、日中同形語を対象として展開されてきた。これらの研究では、母語の品詞体系や統語情報が第二言語の運用にいかに関与するかが多角的に検討されてきた。

何 (2015) は、CLJ が日中同形語を習得する際に、両言語間の品詞体系の相違によって母語からどのような影響を受けるのかを明らかにすることを目的とし、日中両言語の母語話者コーパスおよび日本語学習者作文コーパスを用いて、品詞差に起因する誤用の実態を分析した。その結果、母語の品詞体系からの正の転移と負の転移が同時に存在することが示された。正の転移としては、CLJ が日本語における母語とは異なる品詞機能に気づき、それを適切に運用できる場合が確認された。一方、負の転移としては、母語に存在しない品詞用法を回避する傾向や、逆に日本語において許容されない品詞用法を過剰に産出する傾向が認められた。

熊ほか (2016) は、日中同形同義漢語動詞の受動態処理を対象に、中国語の統語情報の使用頻度が日本語の文処理にどのような影響を与えるかを検討することを目的とした。中国語での受動態使用頻度が高い語(統制群)と低い語(実験群)を設定し、日本語文を読ませながら眼球運動測定によって読み時間と正答率を分析した。その結果、中国語で受動態使用頻度が低い語は、日本語受動文において読み時間が有意に長く、正答率も低下することが示された。これは、語彙全体の頻度だけでなく、母語における統語的使用頻度が第二言語処理に実質的な影響を及ぼすことを示すものであり、統語情報レベルにおいても言語非選択的活性化が起こることを支持する結果であった。

秦 (2024) は、中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、日本語の漢語サ変動詞の品詞性(動詞として使用可能か否か)の習得状況および語彙処理における母語の影響を明らかにすることを目的とした。文法判断課題を実施し、正解率・反応時間・事象関連電位(ERP)を指標として分析を行った。その結果、日中で品詞情報が異なる語では正解率が有意に低く、習得に困難が生じることが示された。また、ERP 分析では、文処理時に中国語の品詞情報も同時に活性化していることが示唆され、統語情報レベルにおいても言語非選択的活性化が生じている可能性が確認された。すなわち、母語の統語情報は日本語処理を促進する場合もあれば、抑制や干渉を引き起こす場合もあることが示された。

これらの研究は、日中同形語の処理および習得において、語彙的意味や書字の一致を超え、

品詞機能や統語的使用頻度といった統語的側面が第二言語運用に大きな影響を及ぼすことを実証的に示している点で共通している。すなわち、母語からの正の転移と負の転移は、語彙レベルのみならず統語レベルにおいても複雑に作用していることが明らかとなっている。

一方、漢語動名詞の品詞特性に関して、李（2014）と陳（2023）はコーパスデータを用いた調査を行っている。李（2014）では、漢語サ変動詞（すなわち、本研究でいう漢語動名詞）の卓立性をコーパスに基づいて計量的に明らかにするため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, BCCWJ)を用いて、高頻度かつ汎用的な漢語サ変動詞(李, 2013)を対象として頻度分析および重回帰分析を行った。その結果、多くの漢語サ変動詞は卓立性が高く、主に「～する」の動詞形で使用されることが示された。また、卓立性の高い語は、意図性が弱いこと、具体的な行為を表さないこと、状態や抽象的関係を表すことなどの特徴を持つことが確認された。さらに、漢語サ変動詞の卓立性を説明するモデルを構築し、語の頻度や語義数、使用される言語環境が卓立性に影響する可能性が示唆された。

陳（2023）では、漢語動名詞の品詞性が語ごとに異なり、日本語教育において学習上の困難を生じさせている点に着目し、BCCWJ および『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC)に基づき、重要漢語動名詞 200 語の品詞性を実証的に再検討することを目的とした。そのため、先行研究で用いられてきた判定基準を整理したうえで、「スル付加・時間表現付加・尊敬表現化」による動詞性判定テストと、「格助詞付加・係助詞付加・『用』付加」による名詞性判定テストを新たに設計し、動詞性と名詞性を独立に数値化した。さらに、対応分析を用いて 200 語を多変量的に分類し、その統語的特性と意味特性を検討した。その結果、漢語動名詞は動詞性の程度に応じて、動詞的動詞（動詞性が最も強い）→名詞的動詞（動詞性がやや強く、主に動詞として用いられる）→動詞的名詞（動詞性をある程度保持しつつ、主に名詞として用いられる）→名詞的名詞（名詞性が最も強い）の四類型に区分できることが明らかになった。また、全体として動詞性が他より際立って高いことが確認されるとともに、各類型はそれぞれ異なる統語特性および意味特性を有することが示された。

以上の研究は、日中同形語や漢語動名詞の処理および習得において統語的側面の重要性を明らかにしている。しかしながら、これらの先行研究の多くは、文法判断課題や心理言語学的実験による処理過程の検証、あるいはコーパスに基づく語彙的特性の記述に主眼が置かれており、実際の言語運用場面において、同一語がジャンルや文体の違いに応じてどのように品詞用法を選択されるのかという動態的側面については十分に検討されていない。したがって、漢語動名詞の習得をより実践的に支援するためには、多様なジャンルにおける文体的機能と品詞選択の関係を体系的に解明することが求められる。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

すでに述べたように、本研究では、現代日本語における漢語動名詞の品詞用法(サ変用法・名

詞用法)が、ジャンルおよび文体とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。この目的を踏まえ、本研究では以下の 2 つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定した。

- RQ1 ジャンルによる漢語動名詞の品詞用法傾向にはどのような差異があるか。また、その傾向に基づき、25 のジャンルはどのような文体グループに分類されるか。
- RQ2 分類された各文体グループにおいて、そのグループを特徴づける特徴語はいかなるものか。

3.2 データ

本研究では、書き言葉データとして BCCWJ、話し言葉データとして CEJC および『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese, CSJ)を利用する。

BCCWJ は、国立国語研究所が中心となって開発した現代日本語の書き言葉の大規模コーパスであり、「新聞」「雑誌」「書籍」「白書」「教科書」など、13 種のレジスターに区分されており、レジスターによってはさらに詳細な下位区分がある(国立国語研究所, 2025)。本研究では、「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」の 3 つのレジスターを統合し、「書籍」として扱う。ただし、「書籍」レジスターは文学、学術、実用など内容的多様性が極めて大きく、全体を単一のジャンルとして扱うと、文体や内容による言語使用傾向の変動が混在するおそれがある。そこで本研究では、日本十進分類法(新)によって「書籍・総記」「書籍・哲学」「書籍・社会科学」などの 10 ジャンルに細分化する。一方、「新聞」「雑誌」「白書」などの他のレジスターは、媒体機能や社会的役割が明確であり、内部の文体的均質性が比較的高いと考えられるため、元の区分のまま分析対象とする。なお、体言止めの多用など、特殊な品詞使用がなされている可能性のある「韻文」を除外する。最終的に、BCCWJ について 19 ジャンルのデータを利用する。

CEJC は、国立国語研究所が開発した話し言葉コーパスであり、40 名の調査協力者の 3 か月の自然会話 200 時間分の会話データを収録している(小磯他, 2023)。本研究では、発話形式に基づき区分された「雑談」「用談・相談」「会議・会合」「授業・レッスン」の全 4 ジャンルのデータを利用する。

CSJ は、国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学が共同開発した話し言葉データベースである。CSJ のデータは音声のタイプによって独話と対話に大別され、独話は「学会」「模擬朗読」「再朗読」「その他」の 5 区分、対話は「学会」「模擬」「課題」「自由」の 4 区分に分類されている(国立国語研究所, 2006)。本研究では、学会発表およびスピーチにおける漢語動名詞の使用実態を考察するため、独話セッションより「学会(講演)」「模擬(講演)」の 2 ジャンルのデータを利用する。本稿では便宜上、これらをそれぞれ「学会発表」と「スピーチ」と呼称する。

以上により、書き言葉の 19 ジャンル、話し言葉の 6 ジャンル、計 25 ジャンルを分析対象とする。

3.3 手法

3.3.1 調査対象語

本研究では、現代日本語で一般的に多用される重要漢語動名詞 200 語（陳, 2023、以下 200 語）を調査対象語とする。これらは、BCCWJ における詳細内容別 65 変種と、CEJC における場面別 7 変種、あわせて 72 変種中の頻度調査を根拠として、その平均頻度とレンジに基づいて選定されたものである。対象語一覧は表 1 に示す。

表 1 重要漢語動名詞 200 語（重要度順）

利用	実施	使用	対応	紹介	確認	増加	発生	表示	作成	説明	参加	推進	発表	存在
理解	表現	期待	活用	注意	設定	設置	開催	減少	変化	購入	提供	比較	検討	結婚
選択	指定	展開	判断	入力	用意	検索	質問	確保	工夫	実現	評価	計算	開始	変更
発見	登録	注目	拡大	規定	導入	決定	相談	完成	指摘	勉強	構成	提出	移動	改善
保存	整備	解決	開発	整理	考慮	低下	安定	促進	維持	把握	登場	上昇	予想	成立
終了	反映	成功	形成	発展	販売	記載	報告	採用	記録	重視	発揮	意識	安心	認識
処理	撮影	配慮	練習	意味	削除	実行	生活	該当	集中	主張	達成	心配	無視	活躍
交換	連絡	観察	成長	分析	充実	強化	対処	継続	掲載	設立	適用	強調	経験	活動
失敗	支援	想像	努力	発達	提案	追加	発行	取得	学習	独立	調整	電話	更新	増大
卒業	加入	推移	吸収	代表	貢献	回答	我慢	調査	発売	一致	接続	派遣	希望	分解
保護	出席	分類	指導	反応	納得	悪化	解消	運転	印刷	進行	相当	準備	経過	違反
出品	反対	記入	感染	提示	証明	落札	到着	防止	放送	否定	演奏	改正	請求	応援
入院	出発	苦勞	訪問	通過	死亡	収集	表明	注文	策定	支給	制定	就職	批判	感謝
施行	所属	支配	共有	合格										

3.3.2 データの事前処理

分析に先立ち、コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用し、分析対象とする 25 ジャンルにおける 200 語の「サ変用法」および「名詞用法」を抽出した。サ変用法の抽出条件については、間淵(2016)において、コーパスからサ変用法をとる二字漢語名詞を抽出する際、キーは「品詞」が「名詞」、「語種」が「漢語」、および「語彙素」の文字数が 2 文字であるという条件が設定された。さらに、後文脈条件として、「語彙素」が「為る」「出来る」「致す」「奉る」「仕る」「遊ばす」「下さる」「なさる」「申す」であるという条件が指定されている。本研究では、間淵(2016)の抽出条件に基づき、対象とする 200 語の直後にサ変動詞が後接する用例を抽出対象とした。名詞用法については、200 語が助詞に挟まれる構文環境を抽出条件とし、構文上、主語・目的語などの名詞的機能が明示的に確認できる用例に限定した。また、複合漢語が抽出されることを避けるため、前方共起条件として「助詞」を設定した。検索に用いた具体的な条件は、表 2 に示す通りである。

表 2 「中納言」で漢語動名詞のサ変用法と名詞用法の検索条件

サ変用法	名詞用法
キー:語彙素が 200 語 前方共起条件:品詞の大分類が助詞 後方共起条件:為る 出来る 致す 為さる 下 さい 奉る 仕る 遊ばす 申す	キー:語彙素が 200 語 前方共起条件:品詞の大分類が助詞 後方共起条件:品詞の大分類が助詞

3.3.3 分析の手順

本節では、RQ の順に沿って分析の手順を述べる。

RQ1 では、まず、25 ジャンルにおける 200 語の「サ変用法」および「名詞用法」を、3.3.2 で示した検索条件に基づき抽出する。得られた各用法の出現頻度を集計し、ジャンル間のデータサイズの差を考慮するため、1 万語あたりの調整頻度を算出する。次に、ジャンル間における品詞用法の分布の偏りを検証するため、25 ジャンル×2 用法(サ変用法・名詞用法)の分割表に基づきカイ二乗検定を行う。さらに、どのジャンルが特定の用法の選択に寄与しているかを特定するため、調整済み標準化残差(z 値)を算出する。本分析では、期待値との乖離が正規化された z 値に基づき、有意水準 1% ($|z| > 2.58$) を基準として各ジャンルの傾向を判定する。最後に、 z 値を基準として 25 ジャンルを分類することを試みる。

RQ2 では、RQ1 で分類された各文体グループを特徴づける語(特徴語)の特定を行う。具体的には、コーパス分析ソフト AntConc(ver. 3.5.9)を用い、あるグループにおける特定の語の出現傾向が他のグループと比較して統計的に有意に高いか否かを、対数尤度比(Log-Likelihood Ratio:LLR)に基づき算出する。これにより、各文体グループの言語的特性を語彙レベルから明らかにする。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 ジャンルによる品詞用法の選択

まず、ジャンルによる漢語動名詞の品詞用法傾向の差異について概観する。対象とする 25 ジャンルにおけるサ変用法および名詞用法の出現頻度(1 万語あたりの調整頻度)を集計し、サ変用法の頻度が高い順に整理した結果が表 3 である。

表 3 25 ジャンルにおけるサ変用法と名詞用法の出現頻度(1 万語あたりの調整頻度)

ジャンル	サ変用法	名詞用法	ジャンル	サ変用法	名詞用法
書籍・総記	4091.51	972.96	学会発表	2587.88	1193.64
書籍・歴史	3698.14	1429.56	ブログ	2570.81	1020.89
書籍・技術工学	3627.60	1109.57	法律	2399.53	3037.91
書籍・自然科学	3472.54	1274.61	スピーチ	2311.94	1290.55
教科書	3444.98	1291.69	白書	2213.82	1338.95

書籍・芸術美術	3381.08	1298.53	広報紙	2063.36	906.02
書籍・文学	3297.60	1668.09	国会会議録	2035.08	1697.37
書籍・産業	3250.08	1243.80	用談・相談	1913.45	1043.70
書籍・哲学	3223.93	1490.87	授業・レッスン	1886.12	1637.01
雑誌	3130.07	1011.00	雑談	1851.00	729.07
書籍・社会科学	3084.14	1341.72	会議・会合	1691.80	1121.58
知恵袋	2880.12	1053.86	新聞	271.54	118.84
書籍・言語	2778.13	1387.35			

表 3 より、分析対象とした大半のジャンルにおいて、サ変用法の出現頻度が名詞用法を上回っていることが明らかとなった。これにより、各ジャンルの文体的特性を超えて、漢語動名詞はサ変用法として優勢であるという一般的傾向が確認された。この結果は、先行研究である李(2014)と陳(2023)の結論を裏付けるものとなった。

一方で、25 ジャンルのうち「法律」のみ、名詞用法の頻度がサ変用法を上回るという特異な分布が観察された。これは、法律文が権利や義務を規定する際、個別の動作を時間的経過に沿って叙述するよりも、事態を法的な概念として固定化し提示することを優先する、制度的文体特有の言語的要請を反映しているものと考えられる。

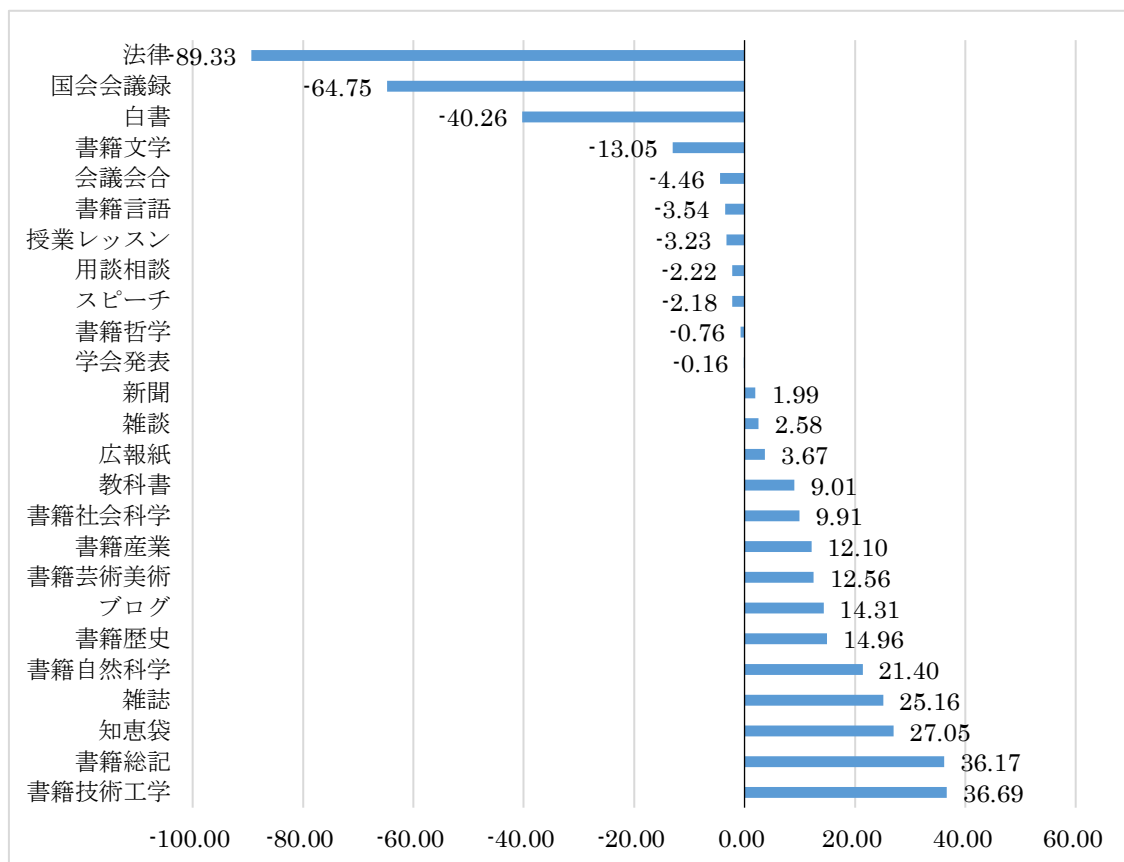
25 ジャンルにおける漢語動名詞の品詞用法選択にジャンル差が存在するかを検証するため、カイ二乗検定を実施した。その結果、ジャンルと品詞選択との間には統計的に有意な関連が認められた($\chi^2(24)=18479.38$, $p<.001$, Cramer's $V=.166$)。効果量は小程度であり、品詞選択はジャンルによって偏りを示すものの、いずれのジャンルにおいても両用法が一定程度共存していることが示唆される。

ジャンルと品詞選択との関連性をより詳細に検討するため、調整済み標準化残差(サ変用法)を算出し、その結果を図 1 に示した。本研究では、漢語動名詞が有する動詞的機能の強度をジャンル差の指標と位置づけ、サ変用法の残差を主軸として分析を行う。サ変用法の正の残差は、当該ジャンルにおいてサ変用法が期待値より有意に多いことを示し、漢語動名詞が動詞的に用いられる傾向、すなわち文体の動態性の高さを反映するものと解釈できる。これに対し、負の残差はサ変用法が相対的に少なく、名詞用法が優勢であることを意味し、事態を概念化・固定化する抽象的文体の特徴を示す指標と考えられる。

図 1 に基づき、ジャンルと品詞選択との関係を以下のように整理する。

まず、正方向に顕著な残差を示す「書籍・技術工学」($z=36.69$)、「書籍・総記」($z=36.17$)、「雑誌」($z=25.16$)などは、期待値に比してサ変用法が有意に多く、漢語動名詞の動詞的機能が強く現れるジャンルである。これらは、具体的な手順や現象の推移を動詞的に叙述する説明的・解説的傾向が顕著であり、動態的叙述特性をもつ文体として位置づけられる。

図 1 調整済み標準化残差（サ変用法）



次に、負方向に顕著な残差を示す「法律」($z=89.33$)、「国会会議録」($z=64.75$)、「白書」($z=40.26$)は、サ変用法が有意に抑制され、対照的に名詞用法が優勢である。これらのジャンルは、動作を過程として叙述するよりも、権利・義務・規定事項として事態を概念化・固定化して提示することを重視する文体であり、静態的・制度的文体の特性を明確に示している。

また、対話ジャンルである「会議・会合」($z=4.46$)および「授業・レッスン」($z=3.23$)がサ変用法の有意な少用を示した点も注目値する。これらは話し言葉でありながら、即興性の高い「雑談」($z=2.58$)とは異なり、一定の情報提示や報告機能を担う場面である。その文体的硬さが、動詞的叙述を抑制し、名詞的用法の選択を促していると考えられる。

なお、 $|z| \leq 2.58$ の範囲にある「用談・相談」「スピーチ」「書籍・哲学」「学会発表」「新聞」「雑談」の 6 ジャンルでは、サ変用法と名詞用法の分布に有意な偏りは認められず、両用法が比較的均衡していることが確認された。

以上より、25 ジャンルは漢語動名詞の品詞用法に基づき、 z 値を基準として次の 3 つのグループに分類できる。

表 4 漢語動名詞の品詞用法に基づくジャンル分類

グループ	ジャンル
------	------

動態的文体 ($z > 2.58$)	書籍・技術工学/総記/自然科学/歴史/芸術美術/産業/社会科学、知恵袋、雑誌、ブログ、教科書、広報紙
中立的文体 ($ z \leq 2.58$)	雑談、新聞、学会発表、書籍・哲学、スピーチ、用談・相談
静態的文体 ($z < 2.58$)	法律、国会会議録、白書、書籍・文学/言語、会議・会合、授業・レッスン

以上、RQ1 では 25 ジャンルにおける漢語動名詞の品詞選択の実態を検討してきた。調整済み標準化残差に基づく量的・統計的な検証により、各ジャンルは「動態的文体」「中立的文体」「静態的文体」という 3 つの文体グループに類型化されることが明らかとなった。

この結果により、ジャンルというマクロな枠組みが品詞用法を規定する重要な要因であることが示されたが、同一グループ内においても、具体的にどのような語がその文体特性を支えているのか、あるいは各グループを特徴づける語彙的差異はどこにあるのかという点は、頻度分析のみでは十分に記述できない。そこで続く RQ2 では、これらの各グループにおいて出現する特徴語を抽出し、語彙レベルの観点から各文体グループの質的な差異を詳細に考察する。

4.2 RQ2 各グループにおける特徴語

RQ1 では、漢語動名詞の品詞選択とジャンルとの関係を、頻度分析および調整済み標準化残差に基づき検討してきた。続く RQ2 では、こうしたマクロな統計的傾向を支える質的な要因を探るため、各文体グループを特徴づける語彙的差異を分析する。対数尤度比 (LLR) を用いて各文体グループにおける特徴語を抽出した結果、グループ 1 (動態的文体) では 152 語、グループ 2 (中立的文体) では 73 語、グループ 3 (静態的文体) では 113 語が特定された。表 5 に、各グループを特徴づける上位 50 語を示す。

表 5 各グループにおける特徴語 (上位 50 語)

順位	グループ 1 (動態的)	グループ 2 (中立的)	グループ 3 (静態的)
1	表示_サ変	意味_名詞	規定_名詞
2	使用_サ変	存在_名詞	整備_名詞
3	購入_サ変	意味_サ変	実施_サ変
4	選択_サ変	意識_名詞	推進_サ変
5	入力_サ変	理解_サ変	規定_サ変
6	削除_サ変	存在_サ変	推進_名詞
7	利用_サ変	強調_サ変	増加_名詞
8	落札_サ変	生活_名詞	促進_名詞
9	出品_サ変	主張_サ変	推移_名詞
10	検索_サ変	支配_サ変	充実_名詞
11	紹介_サ変	否定_サ変	実施_名詞

12	記入_サ変	表現_サ変	確保_名詞
13	設定_サ変	発揮_サ変	違反_サ変
14	発売_サ変	成功_名詞	検討_名詞
15	参加_サ変	経験_名詞	推移_サ変
16	保存_サ変	説明_サ変	減少_名詞
17	撮影_サ変	表現_名詞	調査_名詞
18	登録_サ変	認識_名詞	促進_サ変
19	確認_サ変	発表_サ変	増加_サ変
20	登場_サ変	勉強_名詞	電話_名詞
21	設定_名詞	指摘_サ変	強化_名詞
22	採用_サ変	批判_サ変	施行_名詞
23	放送_サ変	表明_サ変	防止_名詞
24	接続_サ変	感謝_サ変	改正_名詞
25	評価_名詞	努力_サ変	確保_サ変
26	掲載_サ変	勉強_サ変	整備_サ変
27	変更_サ変	認識_サ変	改正_サ変
28	変化_サ変	成功_サ変	報告_名詞
29	作成_サ変	成長_サ変	策定_サ変
30	販売_サ変	感謝_名詞	改善_名詞
31	加入_サ変	批判_名詞	活用_名詞
32	形成_サ変	意識_サ変	対処_サ変
33	請求_サ変	失敗_サ変	減少_サ変
34	存在_サ変	結婚_サ変	安定_名詞
35	注意_サ変	分析_名詞	増大_名詞
36	感染_サ変	反対_サ変	拡大_名詞
37	出品_名詞	主張_名詞	努力_名詞
38	撮影_名詞	実現_サ変	経過_サ変
39	分解_サ変	展開_サ変	質問_名詞
40	構成_サ変	期待_名詞	上昇_名詞
41	更新_サ変	経験_サ変	策定_名詞
42	応援_サ変	発見_サ変	設置_名詞
43	追加_サ変	否定_名詞	設置_サ変
44	記載_サ変	分析_サ変	該当_サ変
45	表現_サ変	活躍_サ変	提供_名詞
46	交換_サ変	発展_サ変	適用_名詞

47	活躍_サ変	反対_名詞	心配_サ変
48	計算_サ変	紹介_サ変	防止_サ変
49	記入_名詞	成長_名詞	指定_名詞
50	削除_名詞	評価_サ変	配慮_サ変

表 5 で示した特徴語に基づき、各文体グループの語彙的特性を以下のように考察する。

まず、グループ 1(動態的文体)においては、上位 50 語のうち約 9 割(44 語)がサ変用法で占められていることが確認された。これは、当該グループにおいて漢語動名詞の動詞的機能が顕著に発揮されていることを示している。すでに述べたように、これらのジャンルは具体的な手順や現象の推移を動詞的に叙述する説明的・解説的性格を強く有しているが、特徴語の分布はその傾向を明確に裏付けるものである。以下に、コーパスにおける実例を示す。なお、漢語動名詞は下線で示す。

- (4)このStarは、価格が一万五千ドルで、画面上に異なる文書を同時に表示するウィンドウのアイデア、プログラムやファイルを表示するアイコン、高解像度のビット・マップ・ディスプレイ、(LBd5_00003、書籍・技術工学)
- (5)拡大撮影には、高橋製のカメラアダプターを使用している。(LBb4_00004、書籍・自然科学)
- (6)何年も生活する上で、けじめやしつけは大切なことですからぜひハウスを購入してほしいと思います。(LBa6_00006、書籍・産業)
- (7)9月に休学することを決めたが、最終的に退学を選択した。(OC01_03302、知恵袋)
- (8)様々な魚達をウオッチングして楽しむこともでき、また今現在この本が発売された時もクダゴンベが2〜3個体、まだ見れるとのこと。(PM11_00109、雑誌)

上記の例からわかるように、技術工学や自然科学の文脈では、このように「表示する」「使用する」(例(4)(5))といったサ変動詞が多用され、システムや装置の機能・動作を具体的に記述していることが確認できる。これらの用法は、事態を動的な過程として提示する文体的特性を端的に示すものである。また、産業、知恵袋、雑誌といったジャンルにおいても、主体による具体的な行為や判断を叙述する「購入する」「選択する」「発売する」などがサ変用法として優勢である(例(6)～(8))。いずれも、出来事を進行中の行為として描写する傾向が強く、動態的文体における漢語動名詞の動詞的機能の顕在化を裏付ける実例といえる。

次に、グループ 2(中立的文体)においては、上位 50 語のうちサ変用法が 32 語(64%)、名詞用法が 18 語(36%)であった。全体としてはサ変用法がやや優勢であるが、サ変用法が圧倒的に多用されるグループ 1 および後述する名詞優位のグループ 3 と比較すると、両用法の分布は最も均衡しており、中立的な傾向を示しているといえる。本グループでは、「意味(名詞／サ変)」「存在(名詞／サ変)」「意識(名詞／サ変)」「認識(名詞／サ変)」など、抽象的概念や心理状態、あるいは思考過程を表す漢語動名詞が多く見られる。これらの語は、名詞として概念そのものを提示する

用法と、サ変動詞として認識・解釈・判断といった過程を叙述する用法の双方で用いられており、文脈に応じて機能的に使い分けられている点に特徴がある。このように、本グループでは概念提示と過程叙述とが相補的に機能しており、漢語動名詞の多品詞性が比較的均衡した形で現れていると解釈できる。以下に、コーパスにおける実例を示す。

- (9) 人をこんなに幸せな気分にしてくれる正義の味方の存在に胸がジーンとする。(PN1e_00005、新聞)
- (10) 会社という大組織にして全国展開し、多額の資本を投資するメリットは存在しないと思う(PN1j_00008、新聞)
- (11) それはわからないけど#カロリーのカロリーの意味じゃ#だから種だからそっからほら生き物が生まれるわけだから(K006_003b、雑談)
- (12) あれは何を意味してるんですかね(T001_019、雑談)
- (13) 未知話者の音声に対して一番近いモデルはどれかなというような計算をして認識をするという形になるんですが(A01M0070、学会発表)
- (14) 不特定話者モデルで入力音声を認識した時の第一候補となるラベル列の尤度を引いてエーフレーム数で(A01M0099、学会発表)

例(9)～(14)から明らかなように、同一ジャンル内においても、特定の概念を提示する場合と、その概念の有無や働きの過程を叙述する場合という両側面において漢語動名詞が用いられている。例(9)(11)では、特定の概念を名詞として提示する用法が見られる一方、例(10)(12)では、その概念の有無や働きを動詞的に叙述する用法が確認される。また、学会発表の文脈における例(13)(14)では、思考や判断の過程を表す「認識」が、名詞的に概念を提示する用法と、サ変動詞として処理過程を記述する用法の双方で用いられていることが分かる。このように、名詞的提示と動詞的叙述は文脈に応じて柔軟に選択されている。以上のことから、グループ2に属するジャンルでは、情報の提示とその過程的説明が相補的に機能しており、漢語動名詞の多品詞性が文体形成において重要な役割を果たしていると考えられる。

最後に、グループ3(静態的文体)においては、上位50語のうちサ変用法が19語(38%)、名詞用法が31語(62%)であり、3グループの中で唯一、名詞用法が過半数を占めるといって極めて静態的な特徴を示している。中立的文体では抽象概念語が名詞用法とサ変用法の双方で機能的に運用されていたのに対し、静態的文体では「規定」「施行」「改正」「整備」などの制度的・規範的語彙が名詞用法として集中的に現れ、文体の性格を形成している点が特徴的である。すなわち、事態を過程として叙述するよりも、制度上の項目や規定事項として固定的に提示する傾向が強い。このことから、グループ2は6:4、グループ3は4:6と数値的には近接しているものの、語彙の質的構成および機能的分布の点において、本質的に対照的な文体特性を有しているといえる。以下に、コーパスにおける実例を示す。

- (15)より関係所有者のうちから代表者を定めなければならない。2前項の規定により代表者として定められた者は、内閣府令・防衛省令で(OL1X_00001、法律)
- (16)現段階においては、地震予知の実現のためには観測網の整備と解決すべき多くの課題が残されているが、地震予知の実用化に(OW1X_00001、白書)
- (17)辞典が見当たらないなど現実的な制約のあることを考慮すると若干の量の増加は予想できなくもない。(PB28_00044、書籍・言語)
- (18)二千十一年から取って参りましたあの受講者数とあと修了シ率の推移をあの前期と後期であるまとめたものとりあえず前回の打ち合わせであの要望いただいたもの(T024_009、会議・会合)

例(15)～(18)からわかるように、政府の公文書や報告性格の強い話し言葉においては、漢語動名詞の名詞用法が優位に運用されている。まず、例(15)の「規定」や例(16)の「整備」といった制度的語彙は、名詞として用いられることで、個別の動作を叙述するのではなく、法律の条項や政策上の「項目」として事態を提示する機能を担っている。また、例(17)の「増加」や例(18)の「推移」といった語についても、変化のプロセスそのものを動的に描写するのではなく、結果としての状態や客観的な指標として提示されている点に特徴がある。このように、静態的文体においては、漢語動名詞が概念化・項目化された単位として機能し、文体全体に制度的・報告的な性格を与えていることが確認できる。

以上のように、RQ2 では、3 つの文体グループそれぞれにおいて特徴的に出現する漢語動名詞の語彙的傾向を抽出し、その質的構成を検討した。その結果、動態的文体では操作・処理・実行といった過程志向の語彙がサ変用法として多用し、中立的文体では抽象概念語が名詞用法とサ変用法の双方で均衡的に運用され、静態的文体では制度的・規範的語彙が名詞用法として集中的に現れることが明らかとなった。これらの結果は、漢語動名詞の品詞選択が単なる形式的交替ではなく、ジャンルごとの文体的要請と密接に関連していることを示している。

5. まとめ

本研究は、現代日本語における漢語動名詞の品詞用法(サ変用法・名詞用法)が、ジャンルおよび文体とどのように関係しているかを明らかにすることを目的とした。特に、25 ジャンルを対象に、重要漢語動名詞 200 語の分布を分析し、頻度分析および特徴語分析を通じて、文体的差異の構造を検討してきた。

RQ1 では、ジャンルと品詞用法との関連を数量的に検証した。その結果、ジャンル間には統計的に有意な差が認められ、漢語動名詞の品詞選択がジャンルに応じて体系的に異なることが明らかになった。さらに、残差分析によって、25 ジャンルは「動態的文体」「中立的文体」「静態的文体」の3つの文体グループに区分できることが示された。

RQ2 では、各文体グループを特徴づける語彙的傾向を質的に検討した。その結果、動態的文体では操作・実行・進行を表す漢語動名詞がサ変用法として多用し、静態的文体では制度的・規

範的漢語動名詞が名詞用法として集中して現れることが確認された。一方、中立的文体では抽象概念語が名詞用法とサ変用法の双方で均衡的に運用され、概念提示と過程叙述が相補的に機能していることが明らかになった。

以上の結果から、漢語動名詞の品詞用法は単なる形式的交替ではなく、文体的要請に応じた機能的選択であることが示唆される。この知見は、日本語教育への応用可能性も有する。漢語動名詞を単なる語彙項目として提示するのではなく、ジャンルに応じた品詞用法の傾向を踏まえた指導を行うことで、学習者の文体運用能力の向上が期待される。

具体的には、漢語動名詞をジャンル別文体の中で提示し、その品詞選択が文体機能とどのように関連しているかを意識化させる教材設計が考えられる。動態的文体・中立的文体・静態的文体の代表的テキストを比較させる活動を通じて、文体差と語彙運用との関係を体系的に理解させることが可能である。

教材用テキストの作成にあたっては、生成 AI の活用が有効と考えられる。実際のコーパスデータから教材用例文を直接抽出する場合、著作権上の制約や、特定の語彙条件を満たすテキストの入手困難さという問題が生じる。生成 AI を用いることで、本研究の分析結果に基づいて語彙条件・文体条件を明示的に設定したうえで、条件を統制した教材テキストを効率的に作成することが可能となる。

以下に、教育的応用の一例として、本研究の分析結果に基づき語彙条件および文体条件を設定し、GPT-5.3 Instant を用いて作成した学習用テキスト(中立的文体・学会発表)を提示する。中立的文体を選択したのは、動態的・静態的文体の中間に位置するこの文体が、学習者にとって両極の文体差を比較する基準点として機能すると考えたためである。例文中の漢語動名詞は RQ2 の表 5 に示した特徴語に基づいており、プロンプトの設定は表 6 に示す通りである。

表 6 テキスト文作成のプロンプト

キーワード:

意味_名詞 存在_名詞 意味_サ変 意識_名詞 理解_サ変 存在_サ変 強調_サ変 生活_名詞
主張_サ変 支配_サ変 否定_サ変 表現_サ変 発揮_サ変 成功_名詞 経験_名詞 説明_サ変
表現_名詞 認識_名詞 発表_サ変 勉強_名詞 指摘_サ変 批判_サ変 表明_サ変 感謝_サ変
努力_サ変 勉強_サ変 認識_サ変 成功_サ変 成長_サ変 感謝_名詞 批判_名詞 意識_サ変
失敗_サ変 結婚_サ変 分析_名詞 反対_サ変 主張_名詞 実現_サ変 展開_サ変 期待_名詞
経験_サ変 発見_サ変 否定_名詞 分析_サ変 活躍_サ変 発展_サ変 反対_名詞 紹介_サ変
成長_名詞 評価_サ変

以上のキーワードに基づき、上級レベルの日本語学習者向け読解テキストを作成してください。

条件 1:学会での口頭発表を想定した文体とすること。

条件 2:「である」体ではなく、「です・ます」体を用いること。

条件 3:言語学や教育学以外の専門分野(例:経済、環境、社会学など)をテーマにすること。

条件 4:各品詞の用法(例:意味_名詞、意味_サ変)に留意すること。

条件 5:すべてのキーワードを使用する必要はなく、自然な口頭発表としての流れを優先すること。

以上のプロンプトに従って、GPT-5.3 Instant は表 7 のようなテキストを作成した。

表 7 GPT-5.3 Instant が生成したテキスト

(以下は、提示されたキーワードを自然に取り入れた上級日本語学習者向け読解テキスト(学会口頭発表風)です。テーマは環境政策と社会変化にしました。できるだけ名詞用法／サ変用法の違いも自然に反映しています。)

本日は、都市における環境政策と市民行動の変化について発表させていただきます。近年、多くの都市では持続可能な社会の**実現**に向けて、さまざまな政策が導入されています。その背景には、環境問題の**意味**や影響に対する市民の**理解**と**認識**の変化があります。かつては経済成長が最優先とされていましたが、現在では環境保全の重要性を**意識**する人が増え、社会全体の価値観にも大きな変化が見られます。

まず、都市政策において環境問題の**意味**をどのように捉えるかが重要です。政府や研究者は、気候変動や資源問題の**存在**を社会に**強調**することで、市民の環境行動を促してきました。また、環境問題が社会にとって何を**意味**するのかを明らかにするため、さまざまなデータの**分析**や事例の**紹介**が行われています。こうした研究は、政策の改善や新しい制度の**実現**につながる可能性を持っています。

しかし、政策が常に**成功**するとは限りません。例えば、ごみ削減政策では、市民の**生活習慣**を変えることが必要になりますが、その過程ではさまざまな**反対**や**批判**が生じることもあります。一部の人々は新しい制度の必要性を十分に**理解**できず、政策の効果に対する**期待**が低い場合もあります。そのため、政策の導入にあたっては、市民への丁寧な**説明**と情報の**表明**が欠かせません。

また、市民参加型の政策では、地域社会の中で新しい取り組みが**展開**することもあります。例えば、地域住民が主体となって再生可能エネルギーの導入を進めるプロジェクトでは、住民同士の協力関係が**成長**し、地域社会の結びつきが強くなるという**経験**も報告されています。このような活動は、単なる環境対策にとどまらず、地域社会の活性化という新しい価値を**意味**する出来事として理解されることもあります。

もちろん、すべての取り組みがうまくいくわけではありません。政策の実施過程では、資金不足や制度設計の問題などによって**失敗**が生じる場合もあります。しかし、そのような**経験**の**意味**を改めて**分析**することで、次の政策改善につながる知見が得られます。この点において、研究者が社会の現象を客観的に**評価**することは非常に重要です。

最後に、環境政策の**発展**には、市民、企業、政府の協力が不可欠です。近年、多くの企業が

環境対策に積極的に取り組み、社会的責任を**表現する**動きが見られます。また、地域社会では環境活動に参加する市民が増え、社会の中で新しい価値観が**発揮されている**と考えられます。このような変化は、持続可能な社会の**存在**をより現実的なものにしていくでしょう。

本日の発表では、都市環境政策の取り組みと市民意識の変化について概観しました。今後は、具体的な政策事例をさらに**分析**し、市民参加がどのように社会の持続可能性を高めるのかを明らかにしていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

上記に示したテキストにおいて学習者が注目すべき点は、漢語動名詞の品詞選択が文体機能と密接に関わっていることである。たとえば、「意味」や「理解」は、概念提示の場面では名詞用法（「環境問題の意味」「市民の理解と認識」）、心理的過程の叙述ではサ変用法（「環境問題が社会にとって何を意味するのか」「新しい制度の必要性を十分に理解できず」）として用いられている。このように、名詞用法が事態を概念化・項目化する役割を担い、サ変用法が思考や研究の進展を動態的に叙述する役割を担うことを理解させることが重要である。こうした用法傾向は学会発表という文体的特性とも結びついており、語彙選択が文体形成の一要因であることを具体的に示している。

本研究は、ジャンルと漢語動名詞の品詞選択との体系的な関連を明らかにし、その多品詞性が文体形成と密接に結びついていることを示した。しかしながら、本研究は単純な漢語動名詞に限定した分析であり、複合漢語における機能変容や語の共起関係、さらに SNS・チャットなどの打ち言葉に見られる新たな運用形態までは十分に扱っていない。また、日本語と中国語における漢語動名詞の機能差・用法差についても、今後は対照的視点からの検討が求められる。これらの課題を踏まえ、より広範囲なデータと分析手法を統合することで、漢語動名詞の文体的機能の全体像を精緻化するとともに、使用場面に応じた適切な語彙運用を支援する教育的応用へと発展させることが今後の課題である。

研究インテグリティ宣誓

本稿著者は、本論文が著者自身によるオリジナルの研究成果であって、他者の著作物の剽窃や盗用、データの捏造や改竄、二重投稿、貢献度を反映しない著者名表記といった一切の不適切行為を行っていないことを宣誓する。なお、生成 AI に関しては、下記の目的でのみ限定的に使用した。

- (1) 日本語文法や表現のチェック
- (2) 学習用テキスト例の作成

ただし、生成 AI の出力をそのまま論文に引用することを含め、研究インテグリティに抵触する可能性がある行為は一切行っていない。

引用文献

何龍(2015)「日中同形語の品詞の違いによる誤用について—中国人の日本語学習者を対象として—」『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』1-10.

- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香(2023)『日本語日常会話コーパス』設計と構築』『国立国語研究所論集』24, 153-168.
- 国立国語研究所(2006)『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所.
- 国立国語研究所(2018)『日本語話し言葉コーパス』(バージョン 2018.01, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/csj/> (2026 年 1 月確認)
- 国立国語研究所(2025)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2026 年 1 月確認)
- 熊可欣・玉岡賀津雄・マンスブリッジパトリックマイケル(2016)「2 言語間の非選択的活性化は統語情報の処理においても起こるかー日中同形同義漢語動詞の受動態の処理を例にー」『認知科学』23(4), 395-410.
- 秦周漢(2024)「中国語を母語とする日本語学習者における漢語サ変動詞の品詞性の習得および認知処理」『立命館言語文化研究』36(1), 37-56.
- 陳迪(2023)「書き言葉・話し言葉コーパスデータに基づく高頻度漢語動名詞の品詞性の再考: 日本語教育の視点から」『言語資源ワークショップ 2022 発表論文集』1, 215-232,
- 前川喜久雄(監修)山崎誠(編)(2014)『書き言葉コーパスー設計と構築ー』講座日本語コーパス 2. 朝倉書店.
- 間淵洋子(2016)「近現代漢語におけるサ変動詞用法の変化ー形態論情報付きコーパスを用いてー」『国際日本学研究論集』4, 17-36.
- 李楓(2014)「漢語サ変動詞の卓立性の再考ー動詞形・構文形比率を手掛かりとしてー」『第 6 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 63-72.